

# 琉球大学学術リポジトリ

## 那覇市の生涯学習が抱える課題と今後の取組み

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2009-06-03 キーワード (Ja): 那覇, 社会教育, 生涯学習, まちづくり, 協働 キーワード (En): 作成者: 宮内, 勇人, Miyauchi, Yuto メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/10428">http://hdl.handle.net/20.500.12000/10428</a>

## 那覇市の生涯学習が抱える課題と今後の取組み

### An Approach to the problem of Lifelong Learning Policy Conducted by Naha City

宮内 勇人\*

キーワード：那覇、社会教育、生涯学習、まちづくり、協働

#### I はじめに

那覇市は、沖縄県本島南部に位置する人口31万6千人余を有する沖縄県の県都、政治・経済・文化の中心地である。また、古くから海外との交流拠点として、「琉球王国」文化が華ひらいた街でもある。21世紀をむかえ、沖縄都市モノレール、中心市街地及び新都心地区を核としたまちづくり、また市民との協働のまちづくりや次代を担う子どもたちの育成を中心とした諸施策を展開し、風格ある県都としての新たな那覇市の実現をめざしている。

しかしながら、全国の多くの都市の例にもれず、三位一体改革に端を発した厳しい財政状況下で、事務事業の選択と集中をめざし、事業の見直し、廃止、休止、経費の削減等が続いている。そういう中であって、本市の生涯学習がどのような状況にあり、どのような課題意識のもとに、これからその公的な役割を如何に果たそうとしているのか、不透明な社会状況の中であって、そのあるべき姿を模索し続ける本市の生涯学習の一端が紹介できればと思う。

#### II 生涯学習課で取り組んでいる事業の概要

生涯学習課の仕事について、なんとなくわかるが、具体的、明確な姿が見えないとの指摘がよくある。そこで、具体的に生涯学習課の仕事を紹介し、イメージを明確にしてもらうこととする。本市教育委員会では、生涯学習課にあった青少年の健全育成部門が、平成19年度から、もっぱら青少年問題を扱っていた「青少年センター」、「やる気元気サポート室」とともに統合され、総勢35名を超える組織「総合青少年課」ができたことにより、生涯学習課は、生涯学習施策の内、社会教育、特に成人教育部門と生涯学習機能の部門に特化することになった。例外的ではあるが、ブックスタート事業（こどもみらい課、健康推進課、図書館、沖縄県子どもの本研究会など、市の関係各課と民間の団体とボランティアの皆さんの協働事業）や、こどもの遊びと学びの事業の実施とプログラムの開発等を行う「那覇こどものためのデザイン」事業などのこども向けの事業も行っている。

以下に、生涯学習課の事務事業を列挙する。

---

\*那覇市教育委員会 生涯学習部 生涯学習課 副参事

- 1 牧志・安里公民館図書館（仮称）の設置に関すること
  - (1) 国土交通省、県、那覇市市街地整備課、市企画財務部、再開発組合との調整
  - (2) まちづくり交付金、起債関係調整
  - (3) 都市再開発法等関係各種法規（法的根拠）の確認・調整
  - (4) 実施設計委託調整業務
  - (5) プラネタリウム事業の方向性と機種選定に関する事務
  - (6) 保留床取得に関する再開発組合との契約、庁議、議会への提案事務
  - (7) 備品整備計画に関する事務
  - (8) 開館準備に向けた諸作業など
- 2 学校開放事業の推進（地域学校連携施設運営に関すること、連絡調整・備品整備・修理等のほか、小学校をコミュニティの核として機能させる仕掛けづくり）
- 3 家庭教育支援事業に関すること
- 4 公民館、図書館、焼物博物館等、社会教育関係機関の運営に関する連絡調整及び指導助言に関すること
- 5 那覇市PTA連合会、那覇市婦人連合会等、社会教育関係団体の育成及び指導助言
- 6 社会教育優良団体及び社会教育功労者表彰式の開催
- 7 生涯学習情報提供事業（学習メニューブック、あけもどろネット）（生涯学習情報提供のための調査、原稿作成、印刷、配布）
- 8 生涯学習推進関連事業（広報・啓発活動）
- 9 生涯学習推進協議会、生涯学習推進本部の運営
  - (1) 生涯学習推進基本計画の進捗調査と課題の抽出、新しい計画の策定
- 10 那覇こどものためのデザイン事業（遊びと学びのチルドレンズミュージアム運営委託事業）に関すること
- 11 ブックスタート、子どもの読書活動推進計画に関すること
  - (1) 子どもの読書活動推進計画の進捗調査と課題の抽出、推進委員会の開催、新たな取り組みの策定、新たな取り組みの依頼、周知等
- 12 育英事業に関すること（財団法人那覇市育英会に関すること）
  - (1) 公益法人に関する法改正に基づく規約等の改正準備に関する助言等
- 13 公民館の使用料・減免措置に関すること
  - (1) 公民館使用料に関する減免措置等検討、条例、規則の改正の事務
- 14 公民館、図書館の運営委託や非常勤館長、指定管理に関すること
- 15 社会教育指導員の募集、選考、配置、勤務、研修に関すること
- 16 小禄南公民館図書館の補修大型工事に関すること
- 17 生涯学習センター整備や中央公民館図書館、久茂地公民館図書館の老朽化への対応等、社会教育施設整備計画の見直しに関すること
- 18 公民館、図書館、PTA、博物館等関連の法的トラブル等各種対処事務
- 19 社会教育委員の会議開催、那覇地区社会教育委員連絡協議会運営関連事務  
これに、21年度からは、「なは教育の日」事業が加わることになっている。

### III 課題と方向性

次に、事務事業の課題と方向性について、主要なものについて説明する。

#### 1 牧志・安里公民館図書館（仮称）の設置に関すること

本市においては、39.23km<sup>2</sup>と狭隘な市域に公民館と図書館をそれぞれ7館（公民館と図書館の複合

施設として)整備し、市民の公民館と図書館へのアクセス距離が1.2km程度になった。

現在は、那覇のメインストリート、軌跡の1マイルとも言われ、名実ともに沖縄の顔として有名な国際通りに面した牧志・安里市街地再開発地区において、商業施設、ホテルとの複合再開発施設内にプラネタリウムを備えた公民館、図書館の整備を進めているところである。

当牧志・安里公民館図書館(仮称)の設置は、都市再開発法にもとづく市街地整備にあわせての社会教育施設の整備であり、モノレール駅との連結で那覇市の中心市街地の活性化にも貢献することが求められる整備であることなど、これまでの本市の社会教育施設整備では初めての手法による取り組みである点に特徴がある。

そのようなこともあって、事業主体である再開発組合からの保留床の買取り、ビル全体計画との関連の整合性の確保、各種法解釈の問題などで、生涯学習課では経験したことのない取り組みが求められ、老朽化した他の公民館、図書館との関連、位置づけの問題の整理や、国土交通省の補助金制度の変化への対応、それによる起債や一般財源の変更、議会对応など、これまででない難しさがある。また、極めて流動的な社会状況の中での作業であり、制度的に一つ一つ確認しながらの作業になっているというのが現状である。

いずれにしても、平成23年度の早い時期での開館に向けて、今後プラネタリウムの機種選定や限られた予算内での内装工事と備品の整備計画、人的配置や引越し移転の計画を具体化していかなければならない。

## 2 学校開放の推進(地域学校連携施設運営)に関すること

学校開放事業の推進を図るためには、現在の地域学校連携施設等の運営方法の確立を図っていかなければならない。具体的には、施設の予約受付、日程調整、鍵の受け渡し、管理など、学校に大きく依存している現状を改め、真に学校と地域がつながることに貢献できる運営のあり方を模索していかなければならない。

那覇市の第四次総合計画でも示した「学社連携・融合の推進(学校施設の地域への開放や地域人材の学校教育での活用など、地域と学校をつなぎ、共に発展する連携のシステムづくりをめざす)」の一つの具体的取り組みとなるものとして極めて重要になってくる事項であると考えている。

## 3 公民館、図書館の運営委託や非常勤館長、指定管理に関すること

公民館、図書館の運営委託や非常勤館長、指定管理については、必要経費の多い順で直営、指定管理、運営委託、非常勤館長の順になるという試算がある。つまり非常勤化が一番安くつくということである。これは、現状の予算が極めてタイトな予算となっている中でのことであり、委託のやり方、試算のやり方によっても変化するものと考えられるが、いずれにしても経費の面で現状では概ねそのような傾向にあるということが言える。財政健全化と時を同じくして指定管理を目指すときのギャップがそこにはある。

また、もうひとつの問題として運営委託、指定管理を受ける団体等の不足があげられる。いわゆる受け皿不足の問題である。公募しても応募がないか、少ない状況がある。市町村の規模等によっても左右されるものであるが、これは、地方都市においては極めて深刻な現実である。

さらに、指定管理になった場合、本市の公民館ではその役目を終えたと判断し、現在は主催事業として実施していないような事業、例えば陶芸教室年間1万6千円、パソコン教室年間1万2千円というように、いわゆる趣味的・実技的利潤の出る事業を志向する傾向は否定できない。公民館が公民館である存在理由、地域の課題への学習の取組み、そのような最も重要な部分への資源の投入がおろそかにならないような配慮、措置が必要となる。

さらには、そうなった場合、民間のカルチャーセンターとの競合、民業圧迫との指摘も発せられる

だろうことは容易に推測できる。このような中で、明確なビジョンを描くことに苦慮している状況にあるが、少なくとも、公民館の運営を市民力、地域の力を発揮する協働の場として受け皿の育成も含めた地道な作業が必要ではないかと思う。

#### 4 社会教育施設整備計画の見直しに関すること

本市教育委員会では、平成5年2月に「社会教育施設（公民館・図書館等）整備計画」をまとめた。これは、住民の学習資源に対するアクセス（接近）を保障し、かつそれをきっかけとして生涯にわたる発展や移行（トランジッション）を可能とする基盤を整備することを目指したものであった。

しかし、モノレールが開通し、当時とは、市民の日常生活の中でのアクセスの有りようが大きく変化するとともに、その後の、行財政計画の見直しなど、とりまく環境も激変した。既存施設の老朽化への対応も大きな課題である。このような変化を受けて、あらためて、施設整備計画を見直す必要にせまられている現状にある。

#### 5 職員の研修、育成に関すること

次のまとめの中でも述べるが、「那覇市の生涯学習は、どこへ行くのか」「我々はなにをめざすのか」、そして「それはなぜなのか」ということについて職員間、そして市民との共有がなければならない。そして、そのためには十分な議論がなければならないし、実践と勉強が必要である。当たり前といえば至極当たり前だが、それが今日、とても難しくなっている。なぜ、難しいかと言うと、これも次にまとめで述べる「生涯学習の拡散」や厳しい財政状況が大きく影響している。つまり、忙しく時間がなくなり、財政的裏付けがなくなっているのである。しかし、そういう中でも、というか、そういう中だからこそ、なんとかしなければならないとの思いも深くなる。時間はなくても、お金はなくても情熱はある。その情熱をかきたてるためにも、研修の機会を確保しなければならない。まとまった時間はなくても、細切れの時間を工夫して時間をつくることはできる。

まずは、金をかけないでも、まとまった時間はなくてもできる有効な研修のあり方を確立しなければならない。

### IV まとめ

さて、当課の主要な事務事業の課題と方向性について述べてきたが、この他にも最近の社会教育、生涯学習を取り巻く環境からくる社会教育関係者にとっての根本的な課題がいくつかあるので以下に述べる。

#### 1 生涯学習の拡散の問題

最近の、教育基本法、社会教育法の改正、各関係答申、各種施策等で特徴的なこととして、家庭教育への取り組みの重点化、青少年中心の施策（学校支援地域本部事業など）の推進があげられるが、その他にも少子化対策やニート問題、雇用労働問題等への取り組みなど、従来、社会教育はもちろん、生涯学習の範疇としても主流でなかったものへの取り組みを求められるようになった点があげられる。

本来、生涯学習が基本とするべきことは、学校教育も含めた上で、市民の自主、自発的な学習をいかに支えるかということであった。また、社会教育の歴史においても市民の側からの「権利としての社会教育」ということが極めて重要な意味を持っていた。しかし、現状では、そういったことが、どこかへ追いやられているのではないかという危惧さえある。

そこで指摘されることの 하나가生涯学習の拡散である。社会教育関係職員は、取り組みたいものがあるのに、取り組めない。取り組むべきと思っているものに割くエネルギーを別のものに割かなければならないジレンマに陥っているという現状がある。

しかし、このことは、自治体としてのプライオリティをどこに置くのか、その中でどのように資源の配分をするのかということ組織として明確にすることや、上から押し付けられたものとしてではなく、今日の社会が抱える重要な課題を学習課題として積極的に取り入れるという視点で捉え直すことにより解決できるものとする。

## 2 根源的な問いへの明確な回答の問題

上記で「市民の側からの『権利としての社会教育』ということが極めて重要な意味を持っていた」と書いたが、はたしてどれだけの関係者がそのことについて意識をしているであろうか。また、なぜ、市民の生涯学習を支えないといけないのか、という根源的な問いにどれだけの社会教育関係者が答えられるであろうか。仮に答えられたとしても、理屈ではわかるが、現に生活している生身の人間のリアリティを前提としたものになっているかどうか。そこのところを明確にできないでいる状況がありはしないか。そんな気がする。

## 3 生涯学習によるまちづくりへの期待と対応の問題

生涯学習には、「生涯学習のためのまちづくり」と「生涯学習によるまちづくり」があると言われてきた。「生涯学習のためのまちづくり」とは、まさしく市民の生涯にわたる学習をいかに支えるか、そういったことが考えの中心にあるまちづくりである。一方、「生涯学習によるまちづくり」とは、生涯学習の過程の中から生まれる人のつながりや、知恵やノウハウ、エネルギーが、まちづくりに大いに役立つ、だからそういった生涯学習を利用してまちづくりを進めていこうという考え方である。

本市では、「市民との協働」のまちづくりを最も重要な取り組みのひとつとして、これまで市長部局の市民文化部・市民協働推進課を中心に取り組んできたところであるが、これから、那覇市は、「協働」の取り組みの総仕上げの時期に入ってくる。まさに、全市をあげて重点的に取り組んでいく時期に入ったわけである。そこで、前述の「生涯学習によるまちづくり」が、「協働」の推進の主力エンジンとして期待されているのである。

したがって、近年の行財政改革とあいまって、市民の生涯にわたる学習をいかに支えるかという「生涯学習のためのまちづくり」は、「生涯学習によるまちづくり」に主役の座を譲ることになった。それは、良く言うと、まちづくりに大きく貢献できる生涯学習が認知されたということでもある。教育基本法に規定された生涯学習の理念や最近の社会教育法改正でも社会教育の成果を適切に生かすことが言及されるようになってきたこと等もあわせて考えなければならない。

ただ、生涯学習課のミッションが「社会教育施設の整備充実、学習情報の収集と提供、相談体制の整備等、学習条件の整備充実」に努め、市民一人一人が生涯を通して生きがいのある心豊かな生活が送れるような社会の実現をめざす。」であることも常に忘れてはならないことである。

## 4 那覇市の生涯学習は、どこへ行くのか

公民館では、自治会や子ども会、婦人会、学校、PTA、地域の商店や企業、高校や大学などを有機的に結んで、地域課題の発見、課題解決への取り組み、多様な市民の学習活動を支える学習機会や情報の提供など、学習を支えながら地域のあり方を考えるための拠点として極めて活発な取り組みができてきているものと思う。

それは、単に趣味的、実技的なもの（個人の充足中心の活動、これはサークル活動に委ねられているところが大きいわけであるが）ではなく、常に今の本市における公的な社会教育の役割を認識しての取り組みである。

そういう意味では、本市における公民館の活動は全国にも誇れる活動であると自負するところであるが、それにしても、おのおのの自治体の実情によっては、そのあり方や役割、評価は、当然異なっ

てくるはずである。

先ほどの認識にしても、狭隘な市域に31万人がひしめき合い、一部に旗頭や青年会、老人会、自治会に代表される昔ながらの極めて強固な地縁、血縁にもとづく地域集合体や、PTAやNPO（105ほど存在）などの目的別集合体があるものの、都市化の中でつながりを失った市民が混然とモザイク状に存在する本市の現状を前提としてなされるもの（都市化にあらがってよくやっている）であることも確かなのである。

いずれにしても、那覇市では、このように、一定の社会教育の充実が図られたわけであり、その成果には満足しなければならない。ただ、課題も多いわけで、それは、先に述べた関係者の苦悩もそうであるが、これからの社会教育、生涯学習のビジョンに関係することでもある。

## 5 ビジョンを達成するためのイメージをリアルに提供し、共有できているか

「公民館は、ダイナミックに多様な主体を巻き込んだ取り組みで活発に活動をし、市民の支持も得ている。各学校は、PTAだけでなく、地域とともに力を合わせて子どもたちの学びと健やかな成長を支えている。これまで、ばらばらだった人たちや組織、団体が協力して街は豊かなつながりと活気に満ちている。」そのような子どもから高齢者まで、みんなでみんなを支え合うボランティアと英知に満ちた風格ある文化の香り豊かな街が私たちのめざすものであることは、誰も疑わないところである。

都市化の中で懸命に地域文化の振興や地域社会と学校をつなぐ取り組みが行われているが、その取り組みは、従来の取り組みをさらに発展させ、より市全域にわたり、より充実したものとしなければならないのである。ただ、そのための具体的なイメージを共有できるところまで至っているかというところである。

このリアルなイメージの共有ができないでいることが、生涯学習の拡散、生涯学習によるまちづくりへのシフトとあいまって、私たちが縛り付けて放さない未達成感の源となっているようにも思う。

また、生涯学習の中でもっとも危惧されることのひとつが、「それはそうだけど、そうは言ってもやっぱり生活が第一だよ」と一蹴されてしまう危うさを内在していることである。そこでは、社会教育、生涯学習は余裕があれば、になってしまいかねない。まさしく、財政出動状況によっては、社会教育、生涯学習が真っ先に予算を削られる候補になりかねないのであり、これも社会教育関係者の内なる憂鬱のひとつとなっている。

## 6 「つなぐ」から「豊かな学習」と「豊かなまちづくり」へ

生涯学習は、学校教育、社会教育、さまざまなかたちのない、あるいは緩やかな学習の機会を、縦に横につなぎ、学校教育の変革も取り込んだ上で、子どもから高齢者まで、市民の生涯にわたる学習を支える仕組みづくりが肝であるとするときに、キーワードは、どうしても「つなぎ」であり「つなぐ」であることになる。

ネット社会で、情報は瞬時に24時間いつでも手に入れられる時代になった。ネットがかかってにつながっており、つなげてくれるのである。そのような時代に、はたして生涯学習は、なにをするのか。一つは、リアルを多様につなぐである。つまり、目で見、耳で聞く、そういうことはネット上でできる。

しかし、直接からだを使って体験する。人と人との直接的なつながり、学習と結びついたそういった直に体験すること、それはまだまだ不十分である。PC上で、目で見、耳で聞く、そのようなクリアでバーチャルな学習情報に比較してノイズも多く、純粹に抽出されたものではないが、五感を使った学習にしかできない、リアルに脳とからだへ働きかける力をもったものがそこにはある。ノイズのない直線的で人工物しか置かない入力の偏った今日の社会では、今後さらに学習における体験、体感

が重要になるであろう。

また、これまで大学の先生に講師としてお願いしていたような講座、教える側と教わる側が分かれていたようなものを、テーマによっては、講座参加者が自分たちで調べ、議論し、企業や学校など現場を訪問し、というように、様々な要素を多様に結びつけ、より豊かな学習を生み出すことが重要である。これらは、これまでもいろいろと行われてきたことであるが、そういった意識を常に持ち、「つなぐ」から生まれる何かを明確にイメージしなければならないという側面を持っている。

2009年1月3日に本市の繁多川公民館で行われた「もちつき大会イベント」では、ボランティアを公募したところ、近隣の石田中学校、松城中学校、真和志中学校、寄宮中学校などから40人を超える中学生の申し込みがあった。彼ら彼女らには、当日の音響係、司会、子どもたちの誘導、地域の方々の案内など、もちつきイベントのすべての運営に関わってもらった。彼らをどう育成していくのか、保護者を、教師を、自治会を、企業を、学校をどう取り結んでいくか、といった事業を単発に終わらせない長期のビジョンや仕掛けが必要である。

このような、学校と地域、高齢者と子ども達などを結びつけた今後の多様な展開につながる取り組みは、さらに増えてくるであろう。このような仕掛けも公民館の大きな仕事である。

もう一つ大切なことは、「つなぎ」「つながる」ことから、社会にとって望ましい何かを生み出すことである。そこから生み出されるのは「豊かな学習」と「何か」。「何か」とは、みんなで支えあい創っていくまちにつながる「何か」である。それは安心安全につながる「何か」であり、健康につながる「何か」であり、豊かな老後につながる「何か」である。また、それは、学校を変革、あるいは学校を支えるというところから出発した地域住民、団体、企業等のネットワーク、人の新たなネットワークなど多種多様にある。ここでやっと「豊かな学習（生涯学習のためのまちづくり）」と「まちづくり（生涯学習によるまちづくり）」がつながることになる。

## 7 最後は「人」、「共感」と「しくみ」づくり

現場において施策の成否を決するのは、やはり最後は「人」ということになると思う。「人」を大切にしなければそこに「共感」は生まれない。「共感」がなければ「協働のまちづくり」は進まない。「人づくり」それは、きわめて「教育」に負うところが大きいはずである。社会教育では、古くからそれをやってきたという自負がある。そのことによりやみんが気づきはじめたという気がする。「そうは言ってもやっぱり生活が第一だね」ではあるけれども、生涯学習は「使える」と気づきはじめたということである。三位一体改革の中で厳しい財政状況にある自治体は、事務事業の見直しに必死で、福祉でさえ守りきれないところがあるのに、やはり社会教育までは守りきれないというのが現実としてはある。しかし、ここにきて少しでも状況が変わりつつあることも確かである。那覇市では、牧志・安里公民館図書館（仮称）の整備を進めている。このように社会教育への投資が続いていることと併せて、状況の変化は、今の那覇市の生涯学習にとっても救いの一つであると捉えたい。

みんながみんなを支える那覇市を創っていくために、社会教育、そして多様な主体をつなぐ生涯学習が期待されているのは間違いのないところある。我々はその期待に応えていかなければならない。それは、ダイナミックで知的でわくわくするものになるはずである。まさしく社会教育専門職員としてはもちろんのこと、地方公務員としてもやりがいのある仕事があるところに待っているのである。

「那覇市の生涯学習は、どこへ行くのか」「我々は何をめざすのか」、そして「それはなぜなのか」ということを明確にし、共感を得ながら「つなぐ」「つながる」仕組みづくりが明確な意図をもって始まろうとしている。

長年、社会教育にたずさわってきた関係者にとって、教育という成果がすぐに見えない仕事では、日々の活動の中での市民とのかかわり、ふれあいの中に喜びを見いだすしかなかったものが、はじめて具体的にみえる形で提示できるものがそこにあるということは、大きな喜びでもあるはずである。

私たちは、職員集団の学習と実践の中から、そして市民との対話と協働の中から、ともに創り出す生涯学習のための、そして生涯学習によるまちづくりを進めるスタートラインにようやく着くことができた気がする。